

151 かぶとやま こふん 兜山古墳



兜山1号古墳

指定 市史跡 平成16年11月24日
 所在地 八幡・蓬田
 所有者 依田 仁



兜山古墳は、浅科地区の西方で、布施地区との境界に近い小高い尾根の先端に2基並列して位置している。ここからは、東方に佐久平一帯を臨むことができる。

平成15年（2003）5月に『浅科村史』の事業の一環で、第1号と第2号古墳の試掘調査が行われ、いずれも5世紀末から6世紀初頭にかけての円墳であることが確認された。

第1号古墳は、直径24m、高さ3～3.5mで、墳頂部の平坦面は8mと広い。埋葬施設は石を用いた石室構造ではなく、典型的な形態ではないが、粘土による粘土郭状の施設であった可能性があり、遺構の状態から墳丘中央部の南北方向に長さ5m以上、幅1m以上の木棺直葬に近い埋葬施設と想定される。

第2号古墳は、直径22m、高さ2.5～3m、第1号古墳から10m東に位置している。同様に墳頂部の平坦面は8mと広く、粘土を主体にし、木棺直葬に近い埋葬施設と想定され、北西―南東方向に2基並列して主体部が存在する可能性を示唆している。

2基の古墳は、二代にわたる小首長墓とみて無理はないものと考えられ、築造の時期は、規模の僅かな差や占地の優位性などからみて第1号古墳が勝ることから、1号、2号の順で築造されたと推定される。

この地には、尾根に近接して流れる布施川の北側に推定古東山道経路、また、尾根の北側直下には、中山道が通過しており、古代から近世に至る間、東国と西国を結ぶ交通路であったが、特に大和政権における都から東国に通ずる交通の要所であり、佐久平の入口という重要な役割を担う位置に兜山古墳が築造されている歴史的意義は大きい。